

## ネパールヒマラヤの植物調査隊に参加して

木場 英久 (当館学芸員)

もうすぐ梅雨が明けようとしている7月、私はネパールで植物調査をするため日本を後にしました。岡山理科大学の星野卓二先生の誘いを受けて、文部省科学研究費補助金の国際学術研究「ヒマラヤ高山帯におけるイネ科およびカヤツリグサ科植物の系統分類学的研究」の分担者として現地調査隊に参加したのです。今回は、この調査にかんする少々お固い部分のお話をいたします。

### ネパールの魅力

ネパールはインドと中国に挟まれた、本州ぐらいの広さの国です。日本から約5,000km西に離れていて、沖縄と同じぐらいの緯度のところにあります。一年中、雪と氷に被われたヒマラヤの山々は有名ですが、標高の低いところには熱帯の地域もあります。当然その間には、常緑樹の林や針葉樹の林があり、森林限界よりも上には高山帯が広がっています。つまり、狭い範囲にさまざまな温度条件の環境があり、多様な植物を見ることができるところです。これが、ネパールの魅力のひとつです。

もうひとつの魅力は、日本の植物と近縁な植物があるということです。世界の各地の植物相を比べると、40ぐらいの地域的なまとまり(植物区系)が認められます。日本は、日華区系という植物区系の東の方に位置していますが、この区系は中国をまたいで西の端はヒマラヤの山々に沿って突出しています。つまり、日本とヒマラヤで、同様

な歴史を背負って発展してきた植物相が、それぞれの地域で分化していったと考えられているわけです。

当博物館の神奈川展示室にある「北からやってきた植物」は、御覧になっていただけでしょうか。ざっと説明すると、氷期になり世界中の気温が下がると、北の方に生えていた植物が、暖かい場所を求めて日本まで南下してきて、さらに氷期が終わると、あるものはまた北に帰ったのですが、一部は高山に逃げて生き残ったという歴史を持った植物です。この「北からやってきた植物」は、近縁な種類が北極をとりまくように北半球に分布していることから、周北極要素の植物ともいわれます。ネパールの高山帯を含むヒマラヤの高山帯には、周北極要素の植物もたくさん見られます。そのため、日本の植物相の歴史や特性を研究するために、ヒマラヤは興味深い場所なのです。

### 調査の目的

ヒマラヤの植物調査は、長年にわたって東大などを中心に進められてきました。毎年のように調査隊が派遣されています。そして現在、世界の植物学者が参加して『ネパール植物誌』作りが進められています(このプロジェクトは、1993年の夏、横浜で国際植物学会議が開かれた際に、当博物館の前身である神奈川県立博物館の講堂で産声を上げたもので、当博物館にゆかりの深い事業です)。すべての調査隊に

とって、『ネパール植物誌』の基礎となる押し葉標本を作ることは、共通の目的です。

今回の調査隊の固有の目的はイネ科、カヤツリグサ科の分類学的・生態学的の研究をすることです。ネパールの高山帯では、ウシの仲間やヒツジ、ヤギなどの牧畜が盛んに行われています。放牧が行われる場所では、家畜が食べない有毒植物やとげのある植物、植物体の上の方を食べられても死なない植物などが増え、独特な景観が作られています。イネ科やカヤツリグサ科の植物は、成長点が付け根近くにあるので、上の方を食べられても生き残ることができ、放牧地の主要な構成要素になっています。ところが、この仲間の植物は、牧草や穀物として人々の生活に役に立つ重要な植物でありながら、いわゆる綺麗な花を咲かせないので、ついつい見落とされがちな傾向にあり、十分に研究されてきたとは言えません。そこで、この仲間の植物に焦点を当てて研究を行うことになったのです。そのなかで私は、1種でも多くのイネ科植物の染色体数を明らかにすることを分担しました。それは、ネパール産のイネ科植物の染色体数はこれまでほとんど分かっていないからです。

### さいごに

野外調査とその前後の準備や後かたづけをあわせて1ヶ月間の滞在でした。ネパールの植物や人々にふれ、印象的な出来事がたくさんありました。調査の様子も、ぜひ紹介したいものですが、ここでは、紙面の都合で紹介できませんが、またいつか、お話したいと思います。

今回の調査で、多数の植物標本と染色体観察の材料を収集してきました。博物館学の教科書に書いてあるような「資料を収集し、それを研究し、成果を普及する」という正常な博物館の仕事の流れに乗せて、資料を有効利用して行きたいと考えています。また、当博物館の初めての海外出張が、良き前例となるよう努力したいと思っています。



図1. 日華区系に固有なハナイカダ属。

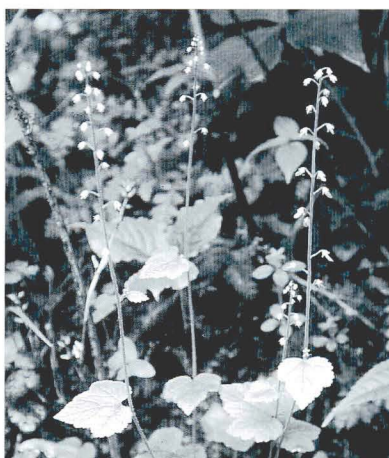


図2. 日本にもネパールにも分布するズダヤクシュ。